

C-6 農村婦人作業衣の変遷(第6報)

—まえかけ(2)—

農林省農技研 日浅治枝子

1. 前回は、農作業用の各種のまえかけの中から、一巾もの、一巾半、二巾ものについて報告したが、今回は三巾もの、四巾もの、胸あてつきまえかけ、その他について、形態、構造、材質、着装方法、変遷等を明らかにし、あわせて今後の農業の変化にとמוなう、まえかけの方向づけを行なう。

2. 過去 20 年間、全国の農村各地域において、多数の農村婦人と面接し、まえかけについての実態調査ならびにききとり調査を行なった。

3. 三巾まえかけ、四巾まえかけはともに第二次大戦後、着用者が激減した。とくに四巾ものまえかけは現物もほとんど見られない。しかし、胸あてつきまえかけは、新潟、秋田、山形県の一部に、今なお着用されている。形態は、二巾もの、三巾ものまえかけの上部中央部位に、四角形、または長方形の胸あてがつくものである。なお、山形県新庄市の場合、着装方法が特殊である。

なお、これらのまえかけは、水田作業用のももひきと密接な関係があるものと考えられる。すなわち、ももひき着用による腰部の冷えを防ぐ一方、ももひきの構造からくる着装時の不安を防ぐという面をもっているのである。しかし、戦後の農家衣生活の洋風化、あるいはその他の諸条件によって、ももひき着用者が急速に減少した。これにともないこれらのまえかけも減少している。